

中間台木の高接ぎ樹への影響

申牟田 拓史・江原 忠彰

(佐賀県果樹試験場)

最近、ウンシュウみかんの過剰化にともない、色々な品種への高接ぎ更新が盛んに行われているが、その中間台木の穂部への影響を検討した。

1. 試験方法

台木：カラタチ

中間台木：15～20年生の早生ウンシュウおよび普通ウンシュウ

高接ぎ品種：N. Hamlin, Page, Fremont, Lee, Robinson, Osceola, Clementine, Nova, Fairchild, Kara, Yalaha, Minneola, Fortune, Seminole, Encore, Murcott, Red Siletta, Bellamy Navel, 吉田ネーブル, オレンジ日向, 宮内伊予柑

接ぎ木：中間台木の主枝～亜主枝に昭和48～49年に高接ぎ。

2. 調査方法

各品種とも早生ウンシュウ・普通ウンシュウ中間台木に各1～3回反復で高接ぎし、両中間台木とも良く結実した品種について、昭和51年から調査した。

3. 調査結果

1) 春葉の大きさは、中間台の間で大きな差はないが、早生ウンシュウ中間台がやや小さいような傾向がみられた。

2) 春枝の長さは、全長・節間とも中間台の早生・普通ウンシュウによる差は、明らかでなかった。

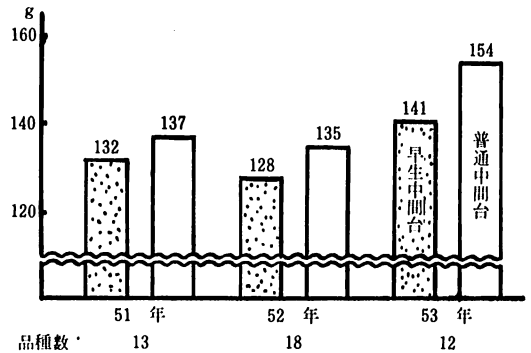
3) 着色は、普通ウンシュウ中間台より早生ウンシュウ中間台が、わずかに早いようであった。

4) 果実の大きさについては、全果収穫調査をしていないので明らかでないが、分析果実で比べた場合、早生ウンシュウ中間台より、普通ウンシュウ中間台が、3ヵ年ともやや大きい傾向がみられた。しかし、統計的有意差はみられなかった。

5) 果皮歩合は、わずかではあるが、早生ウンシュウ中間台が、普通ウンシュウ中間台より多くなるような傾向があった。

6) 屈折計示度・クエン酸含量とも差がなく、中間台の影響がほとんどないようであった。

7) 以上の結果より、早生ウンシュウ・普通ウンシュウ両中間台による穂部への影響は、果実の肥大で、早生ウンシュウ中間台がやや小さくなる以外は、実際栽培上ではほとんど問題にする必要はないものと思われる。



第1図 分析果の1果平均重

第2表 早生、普通ウンシュウ中間台木の穂部への影響

調査項目	春葉の面積		春枝の長さ		着色(11月中旬)			果皮歩合			屈折計示度			クエン酸含量		
	52	53	全長	節間	51	52	53	51	52	53	51	52	53	51	52	53
中間台	15	12	12	12	13	18	12	12	15	9	13	18	12	13	18	12
① 早生	20.7	22.4	78	14.9	5.9	6.8	9.4	22.7	19.1	23.4	11.4	13.1	12.4	1.82	1.75	1.43
② 普通	21.4	23.5	77	15.3	5.5	6.4	9.0	22.3	18.8	22.9	11.6	12.9	12.1	1.80	1.76	1.38
①-② 差	-0.7	-1.1	1	-0.4	0.4	0.4	0.4	-0.4	-0.3	-0.5	0.2	-0.2	-0.3	-0.02	0.01	-0.05
総平均	早生	21.6			7.4			21.7				12.3		1.67		
	普通	22.5			7.0			21.3				12.2		1.65		
	差	-0.9			0.4			-0.4				-0.1		-0.02		